

平成21年度 卒業論文

トルコ語の接尾辞“-mİş”の用法について  
— 付属語の“-mİş”と完了形の“-mİş” —

東京外国語大学 外国語学部  
南・西アジア課程 トルコ語科  
学籍番号：8506160  
西丸 綾香

指導教官：菅原 睦

(40字×40行)

## 目次

序章	2
<b>第一章 問題設定</b>	
第一節 分析対象	3
第二節 先行研究	4
第三節 分析方法	7
<b>第二章 分析結果 付属語の“-mIṣ”</b>	
第一節 形容詞+ <b>-mIṣ</b>	8
第二節 var/yok+ <b>-mIṣ</b>	8
第三節 現在形-Iyor + <b>-mIṣ</b>	9
第四節 中立形-(A)r + <b>-mIṣ</b>	1
<b>第三章 分析結果 完了形の“-mIṣ”</b>	
第一節 動詞語幹+ <b>-mIṣ</b>	1 3
第二節 <b>-mIṣ</b> + 過去の付属語-DI	1 5
第三節 <b>-mIṣ</b> + 断定の補助述語-DIR	1 8
<b>第四章 考察</b>	
第一節 まとめ	2 0
第二節 日本語との比較	2 1
終章	2 3
文法要素一覧	2 5
参考文献一覧	2 5

## 序章

トルコ語はトルコ共和国（約7000万人）を中心に、ブルガリア（約85万人）、マケドニア（約20万人）、キプロス（約20万人）、ギリシア（約10万人）で使用されており、ドイツ（約200万人）など西ヨーロッパ各地でトルコ系移民によって話されている。また、基本語順は日本語のように「目的語・動詞」「形容詞・名詞」で、単語の後ろに文法的な意味を表す接尾辞や後置詞がいくつも付く。

実際、私自身が本学においてトルコ語を学習してみて、述語が文末に現れたり、後置詞がある点などから、フランス語やロシア語などといった他の言語に比べれば学びやすい言語であると感じた。

しかし学習していくうちに、ネイティブの教員が話すトルコ語と、我々学習者が話すトルコ語には微妙な違いがあることに気付いた。それは接尾辞である“-mİş”の使用に関することだ。ネイティブは我々よりもずっとこの“-mİş”を会話中によく使用するのだ。

ではなぜ我々トルコ語学習者はこの接尾辞“-mİş”をうまく使いこなせないのか。どのように“-mİş”を捉えれば使用しやすくなるのか。

この問題を解決することが本稿の目的である。どのような状況で使用し、どのような条件下において使用することができるのかを明示することで、本稿が学習者にとってより‘トルコ人らしい’トルコ語を習得出来るきっかけになれば幸いである。

ここでトルコ語の動詞の主な活用形について少し触れておく。トルコ語の動詞活用の基本になるのは命令形で、それ以外のすべての形は命令形にそれぞれの接辞を付加することによって作られる。以下の表を参考にしていきたい<sup>1</sup>。

命令形	-	gül	笑え
現在形	-Iyor	gül-üyor	笑っている
中立形	-(A) r	gül-er	笑う
未来形	-(y) ecek	gül-ecek	笑うだろう
過去形	-DI	gül-dü	笑った
不定過去形	-mİş	gül-müş	笑ったそうだ

<sup>1</sup> 林徹（1989）『月刊『言語』Vol.18 No.2』「トルコ語のすすめ④」、p.92

## 第一章 問題設定

### 第一節 分析対象

接尾辞“-mIş”には以下のように、後ろに続く名詞の修飾成分として働く用法があるが、これについては今回取り扱わないことをはじめに断っておく。

例) kirlen·miş elbise            汚れた服  
dirty            dress

kok·muş et            腐った肉  
smell            meat

本稿では以下の項目に限定して研究を進めていく。

- 形容詞など+**-mIş**
- 現在形-Iyor + **-mIş**
- 中立形-(A)r + **-mIş**
- 動詞語幹+**-mIş**
- **-mIş** + 過去の付属語-DI
- **-mIş** + 断定の付属語-DIR

本稿では取り扱わないが、他には以下のような使用表現もあるので、いくつかあげておく。文法要素については「文法要素一覧」を参照していただきたい。

- -sA + **-mIş** (仮定の伝聞)

Para -sı ol -say·muş hepsi·ni fakir·ler -e ver -ir·miş!  
money POSS have COND all ACC poor PL DAT give A

お金(彼の)があれば全部貧乏人にあげるそうだ(あげるなんて言っているよ)。

(オーハン、1978、p.120)

- -meli(malı) + -miş (必要の伝聞)

Tren -e yetişebil-mek için ev -den daha erken çık -malı-ymış-ız.

Train DAT catch ABIL for house PP more early go out 1PL

汽車に間に合うために家からもっと早く出るべきだったらしい (私たちは)。

(オーハン、1978、p.121)

- -miş + -miş (不定過去の伝聞)

Herşey -i evvel-den bil-miş-miş; bugün zelzele ol -acağı-ını

Everything ACC before PP know today earthquake have FUT ACC

bile!

even

何もかも以前から知っていたそうだ今日地震の起こることさえ (彼は) !

(オーハン、1978、p.116)

## 第二節 先行研究

接尾辞“-miş”の用法について、あまり先行研究を集めることは出来なかったが Geoffrey Lewis (2000)<sup>2</sup>の文法書において、“-miş”は話し手に目撃された行為ではなくうわさや人から聞いた事実に基づいた情報を言及する定形動詞となったと述べている。

また“-DIR”が接尾した場合は、明確な過去を表し、過去を表す“-DI”と同じように口語では使われると述べている。

gel-miş-tir = geldi                      he(he) came, he (she) has come  
come

<sup>2</sup> Geoffrey Lewis (2000) 『TURKISH GRAMMAR SECOND EDITION』, Oxford University Press

ここで“-DIR”についても少し触れておきたい。Lewis (2000)<sup>3</sup>は“-DIR”を口語においては、強調や想定を示すこともあるとしている。例文があったので以下に引用する。

Belge kasa-da-dir.

(Lewis, 2000, p.94)

文章語で上記のように書かれていた場合、その意味は“The document is in the safe.”となる。しかし、口語の場合その意味は、“The document is surely in the safe, must be in the safe”(想定)となり、もしくは“The document *is* in the safe”(強調)となる。この2つの区別は会話中の話者の声のトーンで区別が出来るであろう。話者が単に事実を述べようとするときは、Belge kasada と言うだろうと Lewis (2000) はしている。

Aksu-Koç and Slobin (1986)<sup>4</sup>は、“-mİş”は推量と伝聞の両方を表すことが出来るが、状態や存在を表す語に接尾したり、反復や習慣、継続の意を表す動詞に接尾する場合には「推量」の解釈は出来ないとしている。また“-mİş”には伝聞や推量の他に神話や民話など物語を語る際にも使用することができるが、歴史的な話や現実的な話が語られる際には過去を表す-DI が使われると述べている。基本的に過去を表す付属語-DI で表されるのは直接的経験だが、歴史的な話などは時が経つにつれ皆によく知られた一般的知識となるため、トルコ語では直接的経験としてとらえられるようになる。したがってトルコの歴史はそのほとんどが過去を現す-DI の形式で表現されているようだ。

また林 (1989)<sup>5</sup>は“-mİş”を‘いわゆる「不定過去」’と呼び、次の3つの用法があるとされている。

i) 「伝聞過去」・・・他の人から聞いた情報を伝える

Ali <u>Japonya</u> 'ya <u>git-miş</u> .    アリは日本に行ったそうです。 Japan    DAT    go
---

(林、1989、p.92)

ii) 「推量過去」・・・現在残されている痕跡などから推量される

<u>Çok</u> <u>iç-miş-im</u> .    私はたくさん飲んだようだ。 much    drink    1
--

(林、1989、p.93)

<sup>3</sup> Geoffrey Lewis (2000) 『TURKISH GRAMMAR SECOND EDITION』, Oxford University Press

<sup>4</sup> Ayhan A. Aksu-Koç and Dan I. Slobin(1986), A Psychological Account of the Development and Use of Evidentials in Turkish

<sup>5</sup> 林徹 (1989) 『月刊『言語』 Vol.18 No.2』「トルコ語のすすめ④」

iii) 「完了」

a. <u>Çok lezzetli ol</u> -muş.	大変おいしく出来上がってますよ。
very delicious become	
b. <u>Gelecek sene evlen</u> -miş <u>ol</u> - <u>acak</u> - <u>sınız</u> .	君達は来年には
next year get married become FUT 2PL	結婚しているでしょう。
c. <u>Çalışmış öğrenci-ler iyi puan al</u> - <u>dı</u> .	勉強してあった学生達は
study student PL good score get PA	よい点をとりました。
	(林、1989、p.93)

iii) の例において a のように “-mİş” が文末にあっても「完了」の解釈を許す場合もあるが、多くの場合 “-mİş” は文末以外の場所にある。b では動詞-ol「～になる」の補語になっており、c は後に続く öğrenci-ler「学生達」を修飾している。

そして “-mİş” を「不定過去形」ではなく「完了形」と呼ぶのが適切だともしている。それは「完了」のみを表す iii) に対し、i) や ii) は「完了」の意味に加えて動作が完了していることに後になって気づいたことが表現されているからである。i) と ii) を区別するのは、完了している動作に気付かせたのが他の人からの情報かあるいは話し手自身の推論の結果かという点である。

さらに “-mİş” を出現位置の観点から考えると 2 つに分けることができると主張している。「伝聞」の付属語と「完了形」だ。この 2 つの相違点のひとつは「伝聞」の付属語は述語の後ろにしか置かれず、文中で修飾語や補語として働くことがないという点だ。また時に関する制約の問題も相違点のひとつで、「伝聞」の付属語には時に関する制約がないため、現在としても過去としても解釈することができるとしている。

Ayşe <u>şimdi hasta-ymiş</u> .	アイシエは今病気だそうです。「伝聞」
now sick	
Ayşe <u>geçen ay hasta-ymiş</u> .	アイシエは先月病気だったそうです。「伝聞」
last month	
	(林、1989、p.96)

### 第三節 分析方法

林（1989）の主張に基づき、本研究で取り扱う項目をグループ分けすると以下のようになる。

#### 付属語の“-mİş”

- 形容詞など+**-mİş**
- 現在形-**Iyor** + **-mİş**
- 中立形-**(A)r** + **-mİş**

#### 完了形の“-mİş”

- 動詞語幹+**-mİş**
- **-mİş** + 過去の付属語-**DI**
- **-mİş** + 断定の付属語-**DIR**

上記の順番で研究を進めていく。

また本来ならばトルコ語母語話者の会話中からデータ収集をし、そこから分析を行っていくのが望ましいが、データ収集が困難だったために、本稿ではトルコ語のテキストから会話文を引用している。



## 第二章 分析結果 付属語の“-mİş”

第二章と第三章では、先にあげておいた各項目について分析した結果をまとめていく。ただし引用した会話文の参考文献は「参考文献一覧」にまとめて掲載してある。また、各例文に文法要素を略式で記入している。詳細については「文法要素一覧」を参照していただきたい。

### 第一節 形容詞+・mİş

例 1. Çay güzel-miş.  
tea good  
  
こいつはうまい！  
(勝田、1986、p.52)

形容詞に“-mİş”が接尾したこの場合、新事実の発見、驚きを表現している。さらに Aksu-Koç and Slobin (1986) は接尾辞“-mİş”を使った表現で賛辞をも表現することが出来ると述べている。接尾辞“-mİş”を使った表現は起こった出来事に対して話者の心構えがなかったこと（予期していなかったこと）を表すことが出来るため、思っていたよりも良かったこと、つまり予想以上の出来事に対する賛辞を述べるときにもこの接尾辞“-mİş”を使った表現が出来る。

### 第二節 var/yok+・mİş

例 2. Bir köy de Yarım-Horoz ad -ın -da bir adam var-mış. Çok  
a villege LOC name POSS LOC a man there is very  
fakir-miş.  
poor  
  
ある村にヤルム・ホロズという名の一人の男がいた。たいそう貧しかった。  
(竹内・勝田、1981、p.2)

例 2 は物語や小説でよく見かける表現である。物語や小説はそのほとんどがフィクショ

ンであり、その筆者が実際に経験したことではないので、“-mİş”が使えると考えられる。しかし日本語訳にする場合、全ての“-mİş”に関して「～だそうだ。」と訳するのが適当だとは限らない。物語中にはかなりの頻度で使われることが多い為、あまり「～だそうだ。」という意に固執して訳さなくてもいいのではないか。実際、日本語に翻訳された小説等を見ても例2のように訳しているものが多いようだ。

### 第三節 現在形-Iyor + -mİş

動詞の現在形に“-mİş”が接尾した形について見てみる。現在形“-Iyor”は現在継続中の動作、現在の習慣、近い未来に起こる動作を表すことができる。

例3. Kyuşu'da şimdi yağmur yağ -iyor-muş.  
 LOC now rain fall PRES

九州では今雨が降っているそうです。

(オーハン、1978、p.117)

例3は現在、継続している動作の伝達を表している。“-Iyor”自体が現在形を現し、それに伝聞の接尾辞“-mİş”が付属したものなので、この場合継続している動作の伝達であるのは理解しやすいだろう。

例4. Dün siz -e git-ti-m ama o an -da siz uyu -yor-muş-sunuz.  
 Yesterday you DAT go PA 1 but the moment LOC you sleep PRES 2

昨日お宅へ言ったけれども、そのときあなたは眠っていたそうです。

(オーハン、1978、p.117)

これも例3と同じ形であるが、注目して欲しいのは文中に過去を表す“gittim (行った)”があることだ。文中に過去のことが示された場合には“-Iyor + -mİş”で、過去において継続した動作の伝聞を表すことが出来る。

例5. Ciro'nun ağabey -si yarın Nara'ya gid -iyor-muş.  
 POSS brother POSS tomorrow DAT go 3PRES

次郎の兄は明日奈良へ行くそうだ。

(オーハン、1978、p.117)

また、例5のように“-Iyor + -mİş”で、<近い未来の行為の伝達>を表すことも出来る。これは現在形“-Iyor”が近い未来の行為を表すことが出来ることに由来していると考えられる。また未来を表す“yarın (明日)”という単語があることもポイントのひとつである。“yarın (明日)”が無く、“Ciro'nun ağabeysi Nara'ya gid-iyor-muş.”であれば、例3のように現在継続している行為の伝達を表し、“次郎の兄は奈良へ行っているそうだ。”という訳にもなり得る。<近い未来の行為の伝達>を表す全ての場合に、未来を表す単語(明日、来週、など)があるとは限らないが、翻訳をするときの目安の一つにすると良いかもしれない。

例6. Ayhan boş vakti-ni resim yap -arak geçir -iyor-muş.  
 free time ACC paint a picture converb spend 3 PRES

アイハンは余暇を絵を描いて過ごしているそうだ。

(オーハン、1978、p.117)

物事の真理や一般的根拠のある事柄の伝達を表す場合にも“-Iyor + -mİş”が使える。物事の真理や一般的根拠のある事柄の伝達を表す用法は、後にまとめてある“中立形-(y)Ar + -mİş”の用法でも述べることができる。例6をこの用法で表すと、

Ayhan boş vaktini resim yaparak geç-ir-miş.

となり、ここでは意味は同じになる。同じ意味を表すことのできる“-Iyor + -mİş”と“中立形-(A)r + -mİş”であるが、微妙な違いがあるのでここで述べておきたい。

i) Her sabah Ayhan kahve iç-iyor-muş. アイハンは毎朝コーヒーを飲むそうだ。  
 every morning coffee drink

ii) Ayhan kahve iç-er-miş. アイハンはいつもコーヒーを飲むそうだ。

上記の2つは同じようなことを述べている。しかし“-Iyor + -mIş”で習慣などを表す場合には「毎日、毎朝」のような習慣を表す単語が必要になる。“Ayhan kahve içiyor-muş.”では単なる伝聞になってしまう。しかし“中立形-(A)r + -mIş”の場合は中立形自体に「いつも～する」といった意味が含まれるので習慣を表す単語がなくても「いつも～するそうだ」という習慣の伝聞が成立する。“Her sabah Ayhan kahve içermiş.”も i) と同じ意味で成立する。

前にも述べたが、反復や習慣、継続の意を表す動詞に接尾する場合には「推量」の解釈は出来ないとされているので、習慣を表しているここでは「推量」という解釈をすることはできない。

#### 第四節 中立形-(A)r + -mIş

動詞の中立形に-mIş が接尾した形について見てみる。中立形は超越時制とも呼ばれ、真理、法則、習慣、能力、意思などを表すのに使われる。

例7. A: Şimdi-ye kadar hiç Karagöz gör-dü-n mü?  
 now DAT untill ever see PA 2 QES

今までにカラギョズ<sup>6</sup>を見たことがありますか？

B: Hayır. Nerede oynu-yor?  
 no where play PRES  
 いいえ、どこでやっているのですか？

A: Artık eskisi gibi sık oyna -mı -yor. Eskiden dini bayram  
 no more ancient like often play NGT PRES past religios holiday  
-lar-da oynatıl -ır-mış.  
 PL LOC be played A

もう昔のようにあまりやりません。昔はイスラムの祝日の時に行われたらしいです。

Sonzamanlarda ise bazı özel yer -ler -de oynu-yor.  
 recently as for some specific place PL LOC play PRES

最近は特定の場所では行われています。

(大澤・今松、1994、p.26)

<sup>6</sup> トルコの伝統的影絵劇。

この用法は習慣を表す使い方である。「よく～するらしい」と訳することができる。習慣を表す用法は中立形-(A)r + -miş の中でもよく使われるのでおさえておきたい。

例 8. Rakı, üzüm-den yapı -ir-miş.  
grape PP be made A

ラク<sup>7</sup>はぶどうから造られるそうだ。

(オーハン、1978、p.119)

例 8 は物事の真理や一般的根拠のある事柄についての伝聞を表す。

例 9. Masaru onaltı yabancı dil bil -ir-miş.  
sixteen foregin language know A

マサルは16の外国語を知っているなんて言っている(そうだ)よ。

(オーハン、1978、p.119)

例 9 は例 8 と同じ形式であるが、話者の疑いや軽視、皮肉を含めて表す表現である。つまり例 8 のように「マサルは16の外国語を知っているそうだ。」と訳することも出来るのだ。しかし、その場合は一般的根拠のある事柄としての裏付けが必要である。例えばマサルが世界各国で生活したことがあることを皆が知っている事実であれば「マサルは16の外国語を知っているそうだ。」と訳せる。皮肉を含めた表現であるか否かは口語の場合であれば会話の内容から判断が出来るであろう。文章語の場合であっても前後の関係から判断することができるであろう。例 8 の用法が使われることが多いだろうが、例 9 の用法があることも覚えておけば良いだろう。

<sup>7</sup> トルコの蒸留酒の一つ。無色透明だが、水を加えると白く濁るのが特徴。

### 第三章 分析結果 完了形の“-mİŝ”

#### 第一節 動詞語幹+・mİŝ

動詞語幹に接尾辞“-mİŝ”が接尾した場合をしてみる。

例 10. Takayoshi <u>Amerika</u> 'ya <u>git</u> <u>-miŝ</u> . America DAT go  タカヨシはアメリカへ行ったそうだ。 (オーハン、1978、p.26)
--

例10は、“-mİŝ”の用法の中でもよく使われる<伝聞>を意味する。伝聞とは「他者から得た情報を証拠として、未知の事柄を推定する」<sup>8</sup>ことである。つまり、自らの経験や知識（視覚）に基づいた事柄ではないことを“-mİŝ”を使って表現することが出来る。

例 11. <u>Dün</u> <u>akşam</u> <u>çok</u> <u>iç-miŝ-im</u> . yesterday evening very drink 1
---

昨夜はたくさん酒を飲んでしまった。

(勝田、1986、p.51)

例11は「飲んでしまった」のは話し手自身の行動であるが、本人がはっきりと認識して起こした行動ではない。“-mİŝ”を使って<無意識の過去><sup>9</sup>を表現することが出来る。この場合も自らの経験や知識（視覚）に基づいた事柄ではないことについて述べている。Aksu-Koç and Slobin (1986) は行為の過程と話者の気付きに関する外面性について論じており、推量としての“-mİŝ”の使用はその行為過程と話者の気付きが無関係であるのに対して伝聞としての“-mİŝ”の使用はその過程と最終的な状態の両方が関係のないものと主張している。

<sup>8</sup> 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』、くろしお出版、p.168

<sup>9</sup> 勝田茂 (1986) 『トルコ語文法読本』、東京大学書林

例 1 2. A: Sürücü -ler o kadar hızlı gid -iyor -lar ki, bazen trafik  
 driver PL such fast go PRES 3 PL so sometimes traffic  
kaza -sı -na neden ol-abil -iyor.  
 crash POSS DAT why be ABIL PRES

運転手があればほどスピードを出して運転するのが、交通事故の原因になり  
 うるのよ。

İşte bak-ın! Orada otobüs kamyon -la çarpış-mış.  
 see look there bus truck PP clash

ほら、見て！あそこでバスとトラックがぶつかってしまったみたい。

B: Aman ne kadar korkunç manzara!  
 oh how horrible view

ああ、なんて恐ろしい光景なんだ！

(大澤・今松、1994、p.24)

例 1 2 は、状況から判断して、新しい事実に気がついた時に “-mİş” が使われていることがわかる。バスとトラックがぶつかった瞬間ではなく、ぶつかった後の事故現場を見て会話していることから視覚に基づいた根拠のある事柄である。ぶつかった瞬間は見えていなくとも事故現場を見て、バスとトラックがぶつかったことは明らかであるから、この “-mİş” の用法を私は <新事実の発見> と呼びたい。

例 1 3. A! Bak, bak, kar yağ-mış. Mayıs 'ta kar yağar mı?  
 look look snow fall May LOC QES

あ！見て見て、雪が降った。5月に雪が降るの？

(オーハン、1978、p.27)

例 1 3 は驚きの気持ちを表す表現である。“-mİş” は推量や伝聞を表す接尾辞であるという概念が強いためこの用法は我々学習者にはあまり馴染みがない表現である。しかし日常会話においては「驚きを表す」という点でよく使われる表現なので覚えておきたい用法である。ここで注意していただきたいのが、“-mİş” は知覚による証拠に基づいて使用されるということだ。例 1 3 で「雪が降った」と言っているのは現に雪が降っているのを見

で言っているのではなく、例えば朝起きて窓を開けてみると外一面に雪が積もっているのを発見した、という様な時に使用される表現である。

## 第二節 -mİş + 過去の付属語-DI

動詞語幹に-mİş が接尾した形にさらに過去形を表す付属語-DI が付属した場合について見てみる。

例 1 4.	A: <u>Rezervasyon-unuz var</u> <u>mi</u> ?
	reservation 2 there is QES
	予約されていますか？
	B: <u>Evet, bir ay önce yaptır</u> <u>-miş-ti -m.</u>
	yes a month ago get done PA 1
	はい、1ヶ月前に（予約）しました。
	(大澤・今松、1994、p.46)

例 1 4 は<完了>を表す用法である。

ここで私は疑問に感じたことがあった。それは単に過去を表す、

bir ay önce yaptır-dı-m. 一ヶ月前に(予約)しました。

との違いは何なのか、ということである。そこで、本学の教員であるトルコ語母語話者に尋ねてみた。まず、“-mİş”は、「人から聞いたこと」であったり、「確信がないこと」について述べる時に使用するということが重要だそうだ。つまり、“-mİş”をつかった完了形で「(予約)しました」と言っているのは、確かに予約したことは覚えているが「何月何日の何時に予約した」ということまでははっきりと覚えていない、というニュアンスが含まれる。逆に、過去形で「(予約)しました」という場合は確信を持って「予約した」という事実を述べている。2つの用法の違いを明確に表して日本語訳するならば、次のようになるだろう。

完了形→ (たしか) 1ヶ月前 (くらい) に予約しました (はずなんです)。

過去形→ 1ヶ月前 (の〇月〇日) に予約しました。(絶対にしました)



例 15. A: İlk defa mı Türkiye 'ye gel -di -niz?  
first time QES Turkey DAT come PA 2

初めてトルコに来たのですか？

B: Hayır. İki yıl önce, Türkiye 'yi dolaş-miş-ti -m.  
no two year ago Turkey OPT tour PA 1

いいえ、二年前にトルコに来たことがあります。

(大澤・今松、1994、p.45)

例 15 は “-miş + -DI” で「～したことがある」という＜経験＞を表している。

例 16. O gün kar yağ-mış-tı. Her taraf buz tut-miş -tu.  
the day snow fall PA every area ice contain PA

その日は雪が降ったのだった。どこもかしこも凍ってしまっていた。

(オーハン、1978、p.111)

例 16 は例 2 と同様、物語や小説などにおいて状況描写に用いられる。“-miş + -DI” は単なる過去の状況描写というよりも「～してしまっていた」というようなニュアンスを含むようだ。

例 17. Dün yol-a çık -say -dı -nız şimdi-ye kadar var-mış-tı -nız.  
Yesterday set out COND PA 2 now DAT untill arrive PA 2

昨日出発していれば、(あなた／あなた達は) 今頃着いていただろうに。

(オーハン、1978、p.111)

例 17 は＜事実に反する過去における推測＞を表現している。「着いていただろう」ということは、実際は着いていないのである。このような用法は先に条件文があることも翻訳判断の基準となるだろう。

例 18. Kitapçı: Buyurun. Ne ara -miş-ti-niz?  
 Here you are what look for PA 2

(本屋) どうぞ。 何をお探しですか？

A: Siz -de Türk yemeği ile ilgili kitap var mı?  
 you LOC Turkish meal PP related book there is QES

こちらにトルコ料理に関する本はありますか？

Kitapçı: Olmaz olur mı? Yemek kitap-lar-ı arka taraf-ta.  
 Of course meal book PL POSS back side LOC

もちろんです。料理本は後ろのほうにあります。  
 (大澤・今松、1994、p.67)

この用法は相手の希望を尋ねたり、自分の希望を述べるときに使う丁寧な表現である。これと同じような用法で“-Iyor + -DI”で表す用法もある。2つの違いについても、トルコ語母語話者である本学教員に尋ねた結果を述べたい。

やはりここでも“-mİş”は、「人から聞いたこと」であったり、「確信がないこと」について述べる時に使用するということが重要だそうだ。例18のように“-mİş”を使用する場合は、話者が「何か探しているのだろう」と推定して尋ねる時に使われる。

Ne ar-ıyor-dunuz? 何をお探しですか？

上記のように“-Iyor + -DI”の形式で述べる場合は、明らかに何かを探しているのが分かっている時に使用される。例えば、本屋で何かを探していて困っているような人を見かけたときにかかる言葉として使えるのがこれである。“-mİş + -DI”の形式を使う場合は、例えば本屋のカウンターに客が来て、「すみません。」と声をかけたときなどに「何かお探しですか？(本屋に来ているのだからきっと何かの本を探しているのだろう)」というニュアンスで使用することができる。

もう一つ気になったことが、「何をお探しですか？」に対する回答である。

i) Türk ile ilgili kitap iste-miş-ti-m.  
 Turkey relative to book want 1

ii) Türk ile ilgili kitap ist-iyor-du-m.

上記の例は2つとも「トルコに関する本が欲しいです（探しています）」という答え方である。2つの答え方においても微妙な違いがある。i) の場合は「トルコに関する本が欲しいです。」の背後に「トルコに関する本だったら何でもいい。特に何に関する本が欲しいかは決まっていない。」という意が含まれる。ii) の方はというと、「トルコに関する本が欲しい。私が欲しいのはトルコの料理（歴史、宗教、文化 etc）に関する本だ。」というように自分が何が欲しいのかが明確な場合に使われる用法だそうだ。

### 第三節 -mİş + 断定の付属語-DIR

動詞に-mİş が接尾した形にさらに断定の付属語-DIR が接尾した形について見てみる。

例 19. A: Gel -di -niz mi?  
come PA 2 QES

着いた？

B: Daha gel -me-miş-tir.  
still come NEG

まだ着いてないみたいだよ。

A: Ne kadar-cık yol.  
how long diminutive way

どれだけかかるの？

B: Dur, acele et -me canım.  
Stop rush NEG my dear

落ち着いて、あせらないで。

(大澤・今松、1994、p.56)

例19の“-mİş + 断定の付属語-DIR”の用法は過去形と同じように口語ではよく使われる表現である。しかしやはりここでも単なる過去形とは微妙なニュアンスの違いがあるようだ。以前にも述べたように“-mİş + 断定の付属語-DIR”を使う場合は確信を持っていない場合に使用するようである。一方、過去形を使って述べるときは何らかの根拠に基づいた確信がある場合に‘daha gel-me-di.’と言えるようだ。

例20. Daha ay doğ -ma -mİş-tir.  
still moon rise NEG

月はまだ昇っていなかったのである。

(勝田、1986、p.53)

この場合は文章語で用いられる用法で、過去形に格調を持たせた表現である。ポイントとしては3人称のみに接続するという点である。

例21. Elbette siz de duy-muş-sunuz-dur.  
of course you too hear 2(PL)

きっとあなた（方）もお聞きになったことがあるでしょう。

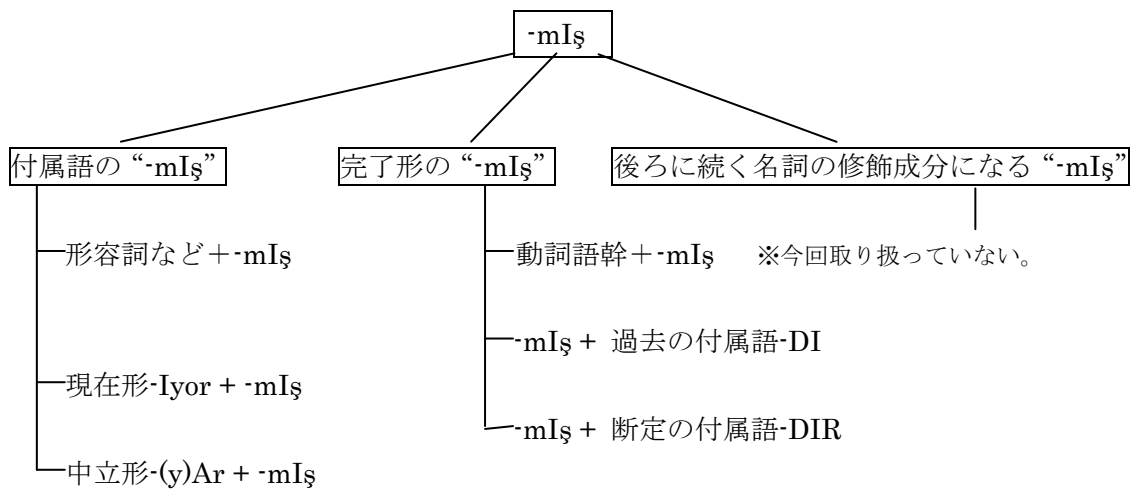
(勝田、1986、p.53)

例21は過去についての確信や断定の要素が加味される表現で、口語で頻繁に用いられるようだ。このパターンは全ての人称において使用することが出来る。例21は3人称になる場合、例20と形態的に同じになってしまうが、文章語と口語の違いで区別することが出来るので、問題ではないだろう。

## 第四章 考察

### 第一節 まとめ

第二章と第三章で論じたそれぞれの用法についてここでまとめておく。以下にまとめてあるのは本稿で取り扱った項目についてのみであることに注意していただきたい。



今までに見てきたように、どの用法においても接尾辞 $-mIṣ$ は話者が直接見たことではないこと又は確信のないこと (hearsay) の要素が含まれていることが重要である。そして確信のないこと=今まで知らなかった (知識がなかった) こと、と考えると、「新事実の発見」や「驚きを表す表現」に $-mIṣ$ が使われることに合点がいくのではないだろうか。また、 $-mIṣ$ の用法において話者の疑いや軽視、皮肉を含めた表現が出来るのに対し、その反対の立場である賛辞を表現することが出来るのは興味深い特徴だと思う。

「 $-mIṣ$  + 過去の付属語-DI」における用法では完了や経験の表現の他に願望の丁寧な表現ができることも覚えておきたい。例18で述べたように「 $-Iyor + -DI$ 」で表現するときとは微妙な違いがある。

「 $-mIṣ$  + 断定の付属語-DIR」における用法では、口語では過去形と同じように使用されるのに対し、文章語では3人称に接続する場合にのみ過去形に格調を持たせた表現になることを覚えておきたい。

## 第二節 日本語との比較

ここで、日本語における推量形について考えてみる。日本語記述文法研究会は「想像や思考によって間接的に認識している」ことを“推量”と定義している<sup>10</sup>。

日本語には推量形を表す表現がいくつかある。

- 1) ～だろう
- 2) ～ようだ
- 3) ～らしい
- 4) ～（し） そうだ
- 5) ～（と） 思う

1) では、話し手自身のことについて言う場合「だろう」を用いることは自然ではない。例えば、

○ 田中さんは、来るだろう。

? (私は) 今晚、君に電話するだろう。

この場合、5) を用いたほうがより自然な日本語になる。

○ (私は) 今晚、君に電話すると思う。

また、上の例文に挙げた「田中さんは来るだろう。」という文に関しても、より自然な日本語の会話文では、「田中さんは、来るみたいだ。」や「田中さんは、来ると思う。」などの表現が出来る。

つまり、日本語では“推量形”と言っても口語か文体か、話し手が事実をどのように捉えているか等で表現が変わってくる。表で表すと以下のようなになる。

	口語体	文体	直接的認識	間接的認識
～だろう	△	○	×	○
～ようだ	△	○	○	×
～らしい	○	○	○	×
～（し） そうだ	○	○	×	○
～（と） 思う	○	×	×	○

<sup>10</sup> 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』、くろしお出版、p.143

このように、トルコ語の推量表現よりも日本語の推量表現は様々な形が存在し、捉え方によって表現が異なることから、私達トルコ語学習者は微妙な日本語の違いに関して、トルコ語ではどのような表現をすれば良いのか迷いが生じているのかもしれない。

また日本語の完了形に関して、我々日本人は意識して完了形と過去形の区別をし、使用する場合が少ない。日本語の「～シタ」について以下の例を参照していただきたい<sup>11</sup>。

<例>

- ・去年、中国に行きましたか？     いいえ、行きませんでした。
- ・もう、中国に行きましたか？     いいえ、まだ行っていません。

一方は過去であり、一方は完了であって、対応する否定形式が異なってくるとされる。このように日本語では過去形と同じような表現を使って完了形を表すことが出来るため、日本語母語話者は日常会話において特に過去形と完了形の違いを意識していないと考えられる。これによって他言語学習における過去の形と完了形の習得が難しくなっているのかもしれない。

小林他（2006）は直接体験・間接体験に関して、日本語の方言について述べている。以下の例は宮城県中田の方言である。

・オラ キノナ ウツァ イダッタ。（私は昨日家にいた）

・ムガス コゴサ トノサマ イダ。（昔ここに殿様がいた）

（小林、2006、p.115）

話し手が知覚体験していない場合にはイダッタは使用できず、イダを使用しなければならない。トルコ語“-mİş”の用法に関して直接体験・間接体験の有無が関係するように、日本語の標準語には無いが、方言には直接体験・間接体験の有無が関係する表現があることは興味深い。

---

<sup>11</sup> 工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』、むぎ書房、p.55

## 終章

本稿ではトルコ語会話において頻繁に使われるであろう“-mİş”の用法に関して5つの項目を取り扱った。

“-mİş”は「付属語の-mİş」、「完了形の-mİş」そして本稿では取り扱わなかった「後に続く名詞の修飾成分になる-mİş」の3つの役割があることはすでに林(1989)<sup>12</sup>やLewis(1967)<sup>13</sup>などにより明らかになっている。

付属語の-mİşは基本的に伝聞又は推量の意味を表していたが、特に伝聞の意味が強い印象を受けた。林(1989)も「-mİşの持つ叙法的意味、特に「伝聞の」意味が人々の注意を引くことが多かったために、あたかもそれが-mİşの中心的な意味と考えられ、その結果「不定過去」と名づけられることになったものと思われ<sup>14</sup>と述べている。そして、付属語の-mİşもすでに完了された事柄を伝達又は推量するという点で「完了」の意が含まれていると考えられる。さらに-mİşが後に続く名詞の修飾成分になる場合も第一章の第一節であげた例、“kirlen-miş elbise (汚れた服)”、“kok-muş et (腐った肉)”のように「○○した～～」といった「完了」の意が含まれるように感じられる。“-mİş”はその出現位置によって成す意味に違いが出てくるが、広い概念では「完了」として捉えることができそうだ。

この「完了」という繋がりが我々日本人に“-mİş”の習得を困難にしているのかもしれない。第四章の第二節で述べたように日本語では過去形と完了形のはっきりとした区別を行わずに、それぞれを表現することが出来るからだ。しかしだからと言って日本人が「過去形」と「完了形」の区別が出来ないわけではない。完了形には「～してしまった、すでに～している」という概念がしっかりと存在する。分からないのではなく、我々日本人は区別して使おうとしていないだけなので過去形との違いをはっきりと認識することで接尾辞“-mİş”の使用も容易にできるようになるだろう。

Aksu Koç(1988)<sup>15</sup>の研究で興味深いものがあった。3.0～6.4歳のトルコ語を母語とする子供を対象に4人の登場人物が出てくる4枚の絵を見せ、それにあった物語を話し、その後子供たちに「～と言ったのは誰か。」という質問をするというものだ。その回答に“-mİş”と“-DI”のどちらが使われ、その正解率は年代によってどう変わるかを調査している。p.24の表を参照していただきたい。Aksu Koç(同上)は調査の結果により、5歳以上になると“-mİş”と“-DI”の違いが感覚的にわかるようになると述べていた。幼い子供はより“-DI”を使う傾向にあるようだ。また面白いのが、5.0～5.7歳になると“-DI”の正解率が落ちている。これはAksu Koç(同上)曰く、このくらいの

<sup>12</sup> 林徹(1989)『月刊『言語』Vol.18 No.2』「トルコ語のすすめ④」

<sup>13</sup> Geoffrey Lewis(1967)『TURKISH GRAMMAR FIRST EDITION』, Oxford University Press

<sup>14</sup> 林徹「トルコ語のすすめ④」、『月刊『言語』Vol.18 No.2』、大修館書店、p.94

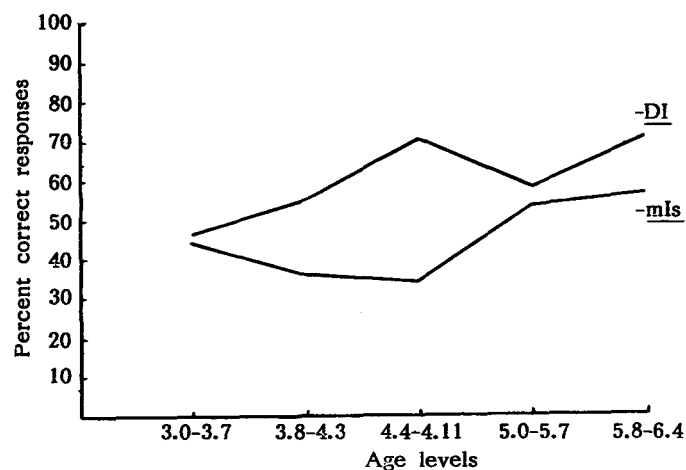
<sup>15</sup> Ayhan Aksu-Koç(1988), The acquisition of aspect and modality: The case of past reference in Turkish, Cambridge[Cambridgeshare];New York:Cambridge University Press, p.136



年齢になると“-mİş”と“-DI”の違いをはっきりと理解し始めるため、“-mİş”と“-DI”の使用頻度が同じくらいになり、このような結果になったと述べられている。

トルコ語母語話者のトルコ語習得においても始めは“-mİş”と“-DI”の使い分けが容易ではないようである。だが前にも述べたように“-mİş”には「完了」という大きな意味があり、その出現位置によってそれぞれの意味をなすことを念頭に置いて使用すればトルコ語学習者にとってよりトルコ人らしいトルコ語会話をすることが可能になるだろう。

最後に、本稿では不十分であった日本語の完了形とトルコ語の完了形における母語干渉の点からのより詳しい研究が今後なされることを期待する。



(Aksu-Koç, 1988, p.140)

## 文法要素一覧

A	aorist : 中立
ABIL	abilitative : 可能
ACC	accusative : 対格 ~を
ADJ	adjective : 形容詞
COND	conditional : 条件
CS	causative : 使役
DAT	dative : 与格 ~に、~のために
FUT	future : 未来
GEN	genitive : 属格 ~の
LOC	locative : 所格
N	neutral : 中立
NEG	negative : 否定辞
PA	past : 過去
PERF	perfect : 完了
PL	plural : 複数
POSS	possessive : 所有格
PP	postposition : 後置詞
PRES	present : 現在
PROG	progressive : 進行
PV	passive : 受け身
QES	question : 疑問
RC	reciprocal : 相互代名詞
SG	singular : 単数
1	first person : 一人称
2	second person : 二人称
3	third person : 三人称

## 参考文献一覧

大澤孝・今松泰編『トルコ語会話』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所、1994

- オーハン・テュレリ 『トルコ語 文法・会話』、(出版地不明)、1978
- 言語研究会編 『ことばの科学3』、むぎ書房、1989
- 小林隆、佐々木冠、渋谷勝己、工藤真由美、井上優、日高水穂 『方言の文法』、岩波書店、2006
- 柴田武 『世界のことば小事典』、大修館書店、1993
- 日本学術振興会 『学術用語集 言語学編』、文部省、1997
- 竹内和夫・勝田茂訳注 『トルコ語民話選』、大学書林、1981
- 日本語記述文法研究会 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』、くろしお出版、2003
- 林徹 『トルコ語 文法の基礎』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1988
- 林徹 「トルコ語のすすめ④」、『月刊『言語』 Vol.18 No.2』、大修館書店、1989
- 林徹 『トルコ語会話の知識』、大学書林、1994
- 勝田茂 『トルコ語文法読本』、大学書林、1986
- Aslı Göksel and Celia Kerslake, Turkish A Comprehensive Grammar, Routledge: London, 2005
- Ayhan Aksu-Koç, The acquisition of aspect and modality: The case of past reference in Turkish, Cambridge[Cambridgeshare];New York:Cambridge University Press,1988
- Ayhan Aksu-Koç and D.I.Slobin, A psychological account of the development and use of evidential in Turkish, in W.Chafe and J. Nichols, Evidential: The Linguistic coding of Epistemology, 1986, pp.159-pp.167
- Aslı Göksel and Celia Kerslake, Turkish A Comprehensive Grammar, Routledge: London, 2005
- Geoffrey Lewis, TURKISH GRAMMAR SECOND EDITION,Oxford;Tokyo:Oxford University Press,2000